

扶助者聖マリアのノヴェナ

6日目（5月20日 木曜日）

信じて、歩む。

⁵²そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

<コメント>

土浦： 今、神様は大きな試練の時を与えて下っています。乗り越えられるように恵みを与えてくださいと祈り続けます。甥の演奏会が5月23日府中の森芸術劇場ウィーンホールで開催されます。2年前まで星美学園の聖堂で実施してきた演奏会。今回は無料で実施することにしました。約30名の青年達が心一つにして、イギリス式ブラスバンドを結成し、多くの方々へ伝えたいという思いは、このコロナ禍でも諦めない。

まさに「**全てが明らかに見えなくても、神が共にいてくださる確信のもと、動き始める**」ことだと思います。急げ信者ですが、出向いて行くことの大切さを見せてくれていると思います。神様は見捨てない。

碑文谷：自分自身が、毎日の生活で、イエズス様、マリア様々と繋がっている事を信じて、歩むべきではないでしょうか？（山本）

東京 ADMA： 今から6年以上になります。当時の指導者から非正規滞在で生活が困窮している家族との出会いがもたらされました。その時は、彼らのおかれている状況も苦悩もあまりよくわかりませんでした。彼らとの出会いを通して、関りながら、話を聞き、彼らの望みをかなえていくうちに、日本での生活がどれほど過酷で人権を踏みにじるようなものであるかがわかってきました。幸い6年の歳月と学びによって、若者は就職することができ、就労ビザを獲得することができましたが、それを機に両親は母国に強制的に帰国させられてしまいました。

困難な中でも収監されているご主人を守り切り、子供の教育をあきらめず、神様を信じ、闇の時も神によりすがり、希望を失わなかったお母さんの姿が今でもよみがえります。（藤永）

ルシマーラ・ムラカミ

5月31日の聖霊降臨の日、19時10分、息子のラファエルがオートバイで大きな事故に遭いました。20時50分、事故の知らせ。病院へ行くように警察から連絡がありました。怪我の具合は、その時はまだわかりませんでした。病院まで、家から約1キロ程の距離、アヴェ・マリアだけ唱えることができました。途中、現場を通った時、ラファエルのオートバイが見えました。オートバイはそれほど壊れていなかったので安心しました。

病院に着くと、集中治療室に案内されました。大変なことになっている、と思いました。ラファエルはベッドの上で、呼吸する度に胸が動いていました。その時、義理の父が似たような症状になっていた時のことを思い出しました。義父はその状態で1時間しかもたなかったことを。夫のニルソンを見ると、涙ぐんでいました。娘のケイコだけが強く対応していました。

私は神が与えたものを全て受け入れます。でも、それは棺の中以外。全ては偶然ではない、神の摂理がある。そこに頭の手術の専門家（水谷先生）がいました。先生はラファエルをととてもよく診てくださいました。病室から出た時、マリア様が守ってくださるように、跪いて叫び始めました。私の母が他の人から事故のことを聞く前に、

私が知らせなければならぬと思いました。母親がこの知らせを受け入れられるように、マリア様に祈りました。母は、一緒になって祈りましょうと言いました。最初の手当の後、再び呼ばれて病室に入りました。息子の呼吸は落ち着いていて、管が付けられていました。

先生の説明では、ラファエルは頭蓋骨に出血があり、重症だということでした。出血性外傷、胸の外傷、そして大腿骨が折れていました。しかし、その時点では手術はできませんでした。翌日の11時にまた来ることになって、その後5分だけ彼を見ることができて、家に帰りました。夜の間には、良くも悪くもなりません。顔色は真っ青、死んでいるように見えました。体の左側だけ、体温が感じられました。看護師さんにタオルを持って来るように指示され、ニルソンが、それはブルーでなければと言いました。看護師さんが理由を聞くと、それはマリア様の色だからと夫は答えました。

その夜ミサに行きました。ラファエルのために祈りました。名前はわからなかったけれど、一人の日本人女性がアパレシーダのマリア様の像をもってきました。私はそのマリア様を抱きしめて一生懸命お願いしました。2日目にタオルを持って行くと、看護師さんが、それを彼のところへ持って行きなさいと言いました。3日目には、彼の肌は普通になっていました。

家に戻った時、アンブロジオ神父様にいただいたエルサレムの油を見つけたので、持って行ってラファエルの頭に塗ることにしました。油を塗る時、アヴェ・マリアを唱えました。この油は強いバラの香りがしていたので、看護師さんに注意されました。私はその意味がわかりませんでした。どうしてバラの香りがしたのでしょうか。そこにマリア様がいてくださったしるしだと思いました。瓶の下には一滴の赤い油がありました。

6月9日に足の手術、複雑だったので18時間かかりました。6月13日聖アントニオの日、怪我は山を乗り越えました。6月15日、たくさんの管が外れました。自分で呼吸ができるようになったので、胸に穴を開ける必要がなくなりました。マリア様はいつも共にいてくださいます。

面会は全て禁止。危ない状態からは抜けましたが、炎症のために脳の腫れがひきません。私は病院の駐車場で祈り続けました。

6月24日、集中治療室から出て、一般病棟へ移りました。まだ意識はありません。

7月2日、眠そうに目を開けました。目を開けているけど、焦点が定まりません。7月6日、骨髄から水を取り除いたので、浮腫がなくなりました。しかしその後、病状が悪くなり、吐き続けました。高熱が出ました。医師は、待つ以外に手だてはないと言いました。病院を出て教会のミサに行きました。神の望みを受け入れられるように祈りました。ラファエルの苦しみはとても大きかったから。神の望みは、いつも私たちの望み以上です。翌日には熱が下がり始め、医師が手術をしましょうと言いました。水谷先生を信じました。7月21日が手術の日になりました。22日は目を開け、焦点が合うようになっていました。私たちの声を聞いている様子でした。私は彼の目を検査するように頼みましたが、交通事故の結果なので、何もすることはできないと言われました。

3ヶ月後、理学療法士の病院に転院しました。最初の判断で、栄養のための管を着けていたので、彼はずっと食べていませんでした。新しい病院の医師は、管を一旦外して、それで口から食べられないようなら、もう一度挿管しましょう、と言いました。同意書にサインを求められ、マリア様の助けを信じてサインをしました。

9月2日、ゼラチン状のものを口に入れて、喉に詰まったような感じがしていたけど、飲み込むことができました。これは最初のおおきな勝利でした。数日後、30mlのゼラチンを食べることができました。医師は、潰した食べ物を与えても良いと判断しました。

彼が好きな食べ物を持って来るようにと言われました。9月27日、大天使ミカエルの日、みんなの驚きの中で、彼は自分で食べ物を取って食べました。大きな感謝のお祝いの日でした。「大丈夫ですか」、医師は私の姿を見てそう尋ねました。10月3日、頭を動かして意思の疎通ができるようになってきました。10月7日、ロザリオの

聖母の日、普通に食事を摂ることになりました。ラファエルは普通の食べ物を食べたがっている、と医師が判断したからです。

10月30日、目の後遺症が確認されました。11月1日すべての聖人の日、再び食べたい、と意思表示をしました。11月11日ある司祭が、聖体礼拝の時にラファエルのオートバイの事故の話をしました。人の癒しを願っていた主が、彼の脳を治すでしょうと言いました。

11月29日、ラファエルが初めて、「おかあさん、おかあさん、お母さん」と言いました12月8日、聖ヨセフの祝福を受けました。教皇様は、その年を「聖ヨセフの年」として発表しました。

ルルドのマリア様のおメダイをいただきました。それを私に下さった方が、おメダイを枕の下に置くようにと教えてくれました。しかし、看護師さんが外していました。それで、枕カバーの中に固定しました。聖体礼拝の時、再び主からの確認がありました。私が病室に入ると、彼は私に「おーい」と言いました。奇跡に感謝しています。私たちがこういう恵みを受けるには相応しくないけれど、でも、あなたと共に頑張り続けます。

困難な中で、ラファエルはコミュニケーションを取ろうとしています。ルルドが欲しいと願います。理由は分かりませんが、私たちはそれを作りました。私たちも、いつかルルドに行けるでしょうか。

2月20日、私たちの生活が痛みや困難の中で変化して行く中で、力をいただき、将来の道が開き始めました。

5月13日、右の足と右の手を上げることができた恵み。

毎日のミサが、私たちのこの歩みをカづけ、私たちは、決して一人ではなく、いつも共にいてくださる神様がいる、という確信を持つことができました。

このパンデミックの中で、祈りを通して私たちを支えてくださった大勢の方々に感謝しています。神のいつくしみと無限の愛によって、私たちは一人ではないのです。マリア様がいつも見守ってくださる確信を与えてくださいました。命の賜物を与えてくださる神に賛美。



<扶助者聖母マリアのご像の紹介>

浜松（トリノのマリア）



私はガビ・ナガミネです。カトリック浜松共同体に所属しています。

イタリアのトリノの扶助者聖マリア大聖堂で、ADMAの約束をした体験を分かち合いたいと思います。

2012年9月22日、その日は約束をする人たちにとって特別な日。10人でした。

大聖堂に入って驚いたのは、扶助者聖マリアの絵の大きさでした。聖堂に入った時、言葉で説明できないほどの大きな平和を感じました。聖堂の脇に小さなチャペルがありました。ひとつはドン・ボスコのもので、その場所に身を置き、そしてドン・ボスコと一緒にいる聖人たちのご像を見ることを、私は夢見ていました。扶助者聖マリアの顔を真ん中にして、使徒たち、天使と聖人たち、足元にオラトリオがいます。

ミサはアンヘル神父様が司式しました。祭壇をかこんでいること、大きな恵に私は感動し、幸せでした。もう一

つ思い出すことがあります。私は、みんながマリア様にした手紙を奉納するように選ばれました。それを運ぶ時でした。自分に問いかけました。「なぜ、マリア様は私が運ぶことを望まれたのでしょうか。」涙がでました。「私は何者？何者でもないのに。」これはずっと心の中にあり、忘れることができませんでした。約束の時、それぞれが自分の言葉で祈りを唱えたことに感動しました。特に、神父様が私たちそれぞれの名前を呼び、私たちが「ここにいます」と答えた時。そして約束のカードにサインをした時。ADMA の霊性、内的生活を自ら選んで生きることは、瑞々しいことです。

ADMA はキリスト者の道であり、聖性の道です。

ミサの後、庭に出ました。そこでたくさんのお子どもたちが歌い、遊んでいました。

ありがとうございました。

<最後の祈願（ドン・ボスコが作成した扶助者聖マリアへの祈り）>

「おお、マリアよ、力あるおとめ、
輝かしい教会の母、
素晴らしいキリスト者のたすけ、
戦いによって配置された軍勢のような力をもち、
世界のあらゆる異端をうちこわし、
不安や苦難、
困難にあってから私たちを守るマリアよ、
私たちが死を迎える時、
魂を受け取り、
天国へと導いてください。
アーメン」

<祝福>